

現代フランス語における代名詞の指示機能

— il/elle と ça の競合関係を中心に* —

喜 田 浩 平

0. はじめに

現代フランス語の3人称単数代名詞 il/elle (以下 IL と略記) と指示代名詞 ça を文中の主語位置で使用する場合、統語上の制約は殆ど共通しているのでいずれも生起可能な環境が多く存在する。しかしフランス語を母語とする話者は何らかの理由によって両者を使い分け、ある文脈や状況においてはどちらか一方だけを選びもう一方は不自然と感じる。ではこの理由とは何であろうか。本稿はこの問題の解決に貢献することを目的とする。

多くの研究が指摘するように、IL は文法的性と数を備えた名詞によって表される対象しか指し示すことが出来ない。それでは ça は名詞以外の言語形式によって表される内容だけを指し示すのかというと、確かにそのような場合が多いのは事実であるが、そうではない場合すなわち名詞の表す対象を指示する場合も少なからず存在する。したがって、二つの代名詞の用法に一貫した説明を与えるためには、言語の構造的側面に拘泥しているとあまり有益な結果が期待できないことになる。我々としては、言語表現が表す対象の性質や存在様式の違いに基づいて、代名詞の分布を説明することを試みる。

以下ではまず最初に、文法範疇と代名詞の対応関係に基づいた説明を検討し、名詞という範疇と代名詞の関係に問題があることを指摘する。次いで、名詞の対象と代名詞指示の関係を論じる。そこでは、名詞の語彙的性質によって対象の存在様式が異なる場合と、名詞が文脈的要因によって様々な対象を導入する場合とを、それぞれ具体例とともに観察する。いずれの場合にも、対象が具体的で個別的な様相を呈していれば IL が使われ、そのような性質が欠如していればいるほど ça が要求される、ということを確認する。

なお、我々の関心は二つの代名詞が競合する場合に向けられているので、考察の対象を両者が同じ環境に登場する場合に限定する。したがって IL の複数形、il および ça のいわゆる非人称的用法 (そのうちのいくつかは競合関係にあるが考慮に入れない)、動詞が être の場合 (C'est) と

いう形式の代名詞が *ça* なのか *ce* なのか判然としない), などは排除する。また議論を単純にするためにいわゆる文脈照応 (代名詞の解釈が言語文脈内部の情報に依存する場合) だけを取り上げ、いわゆる外界照応 (発話の現場に存在する事物を話者が主に動作を伴って指し示す場合) は扱わない。

1. 文法範疇と代名詞

代名詞 *IL* と *ça* の使用制限は、両者がそれぞれどのような文法範疇 (「名詞」「動詞」など) と結びつかか、という観点から説明されることが多い¹⁾。この場合、前者は名詞に、後者はそれ以外の文法範疇に対応する、という説明が最も一般的である。確かに、名詞以外の文法範疇で表現されている意味内容を指し示す場合には *ça* が要求され、*IL* は使用できない。この点は次の例を見れば明らかである。

- (1) a. Elle viendra. *Ça* me fait plaisir. (CORBLIN 1991)
b. *Elle viendra. Il me fait plaisir. (*ibid.*)
- (2) a. Ce qu'il dit, *ça* m'ennuie. (HERIAU 1980)
b. *Ce qu'il dit, il m'ennuie. (*ibid.*)
- (3) a. De le voir là, *ça* me crève le cœur. (*ibid.*)
b. *De le voir là, il me crève le cœur. (*ibid.*)
- (4) a. Qu'il ait réussi, *ça* ne vous réjouit pas. (*ibid.*)
b. *Qu'il ait réussi, il ne vous réjouit pas. (*ibid.*)

一方、名詞によって導入された対象を指示する場合、原則的には *IL* が用いられ、*ça* の使用は困難である。次の例を参照されたい。

- (5) a. Je n'ai pas pris ton stylo : il n'avait pas de plume²⁾. (CORBLIN 1987)
b. *Je n'ai pas pris ton stylo : *ça* n'avait pas de plume. (*ibid.*)
- (6) a. Mon zizi, il sert à faire pipi debout. (KLEIBER 1990)
b. *Mon zizi, *ça* sert à faire pipi debout. (*ibid.*)

次の例は *ça* が名詞句と同じ対象を指示しているように見えるため上記の制約の反例のように考えられるかもしれないが、実際はそうではない。

- (7) Pierre m'a fait un cadeau, ça m'a fait plaisir. (CORBLIN 1987)

ここでçaが受けているのは、名詞句によって表される「贈り物」という対象ではなく、文全体が表す「ピエールが贈り物をしたこと」という内容である。したがってçaの一般的機能から逸脱するものではない。

ところが、明らかにçaが名詞句と結び付けられて解釈される場合も存在する。

- (8) Hier, j'ai lu un livre de Simenon. Ça m'a beaucoup impressionné.

- (9) Louise : [...] C'est le désir de l'autre qui suscite le mien.

Octave : Il y a une explication, mais ça va te vexer.

Louise : Eh bien, vas-y!

(*Les nuits de la pleine lune*, p. 10)

したがって、ある対象が名詞で表現されているからといって、それを指示するのに必ずしもILが要求されるわけではないことがわかる。それゆえ、名詞によって導入される対象のうち、ILあるいはçaによって指示されるものがそれぞれどのような性質あるいは存在様式を持っているかを考察する必要がある。

2. 対象の性質と代名詞指示

名詞によって導入される対象は、この名詞の語彙的性質の違いに応じて様々な存在様式を取り得る。このような対象の中でどのようなものがどちらの代名詞によって指示されるか、ということを観察すると、概ね次の三種類の対象が確認される。つまり、ILでしか指示できない対象、両方の代名詞によってほぼ同程度にできるもの、そしてçaは問題ないがILはかなり不自然か完全に不可能なもの、である。以下ではそれぞれの例を詳しく検討する。

(I) 最初の場合、すなわちILのみが可能な例は、上記の(5)、(6)のような場合である。ここで問題になっている対象は、具体的で物質的な実体である。

(II) これに対して、もし対象が具体性や物質性を失うかあるいはそれに加えて抽象性や非物質的側面などを持っている場合、çaの使用が可能になる。

「自動車」や「万年筆」などは知覚可能な物質的存在である。このような対象を次のような文脈で指示するのにILは問題ないが、çaを使うことはできない、というのは既に見たとおりである。

- (10) a. Hier, j'ai acheté une voiture. Elle me plaît beaucoup.
b. *Hier, j'ai acheté une voiture. Ça me plaît beaucoup.
- (11) a. Hier, j'ai acheté un stylo. Il me plaît beaucoup.
b. *Hier, j'ai acheté un stylo. Ça me plaît beaucoup.

ところが、「本」や「写真」などは少し違った性質を持っている。というのも本というものは単なる紙の集積ではなく、読むことによって「内容」や「思想」を取り出すことができるものだからである。また写真も同様で、単なる紙切れ以上のものとして、そこに写し出されたイメージを人間が読み取るという性質がある。こういった非物質的側面を備えた対象を指示する場合、上記の例と同じ文脈にあっても、çaを使用することが可能である。また、ILも排除されない。

- (12) a. Hier, j'ai acheté un livre de Colette. Ça me plaît beaucoup.
b. Hier, j'ai acheté un livre de Colette. Il me plaît beaucoup.
- (13) a. Hier, j'ai acheté une photo de Man Ray. Ça me plaît beaucoup.
b. Hier, j'ai acheté une photo de Man Ray. Elle me plaît beaucoup.

ただし、代名詞を含む文が明らかに対象の物質的側面に言及している場合は、çaの使用が不可能になる。

- (14) a. Hier, j'ai acheté un livre de Colette. Il a déjà perdu sa couverture.
b. *Hier, j'ai acheté un livre de Colette. Ça a déjà perdu sa couverture.

ILもçaも両方使えるもう一つの例は、(9)で見られるような派生名詞によって表される意味内容を受ける場合である。動詞と派生関係にある名詞⁹⁾は一般に動作や状態を表し、これは感覚的に捉えることができない抽象的存在であり、その性質は物質的な実体と大きく異なる。このような対象を指示する場合は、çaの使用が可能になる。また、ILも排除されず、次の例では二つの代名詞が継起的に使われている。

- (15) Bastien : j'ai une répétition, demain, et je ne sais pas quand elle finira.
Louise : Je t'attendrai. Jusqu'à minuit, même plus tard.
Bastien : Oh, ça finira avant!
(*Les nuits de la pleine lune*, p. 55)

(III)最後に、ça は問題なく使用できるが、IL はかなり不自然な場合を観察する。ここでは対象が何らかのカテゴリに所属しているかしていないか、という要因が関与してくる。

ある対象が「自動車」や「飛行機」という名前で表現される場合、この対象はそのような名称の範疇に属するものとして分類されたことになる。こういった対象を指し示す場合 IL は使用可能であるが ça は排除される。

- (16) a. Hier, j'ai aperçu un avion dans le ciel. Il se déplaçait lentement.
 b. *Hier, j'ai aperçu un avion dans le ciel. Ça se déplaçait lentement.

ところが我々の言語使用の現場において、何らかの理由で、ある対象がどのような範疇に属するのか明確でないこともある。このような対象を表現する言語形式として、フランス語では一般的でニュートラルな名詞(《chose》《objet》《truc》など⁴⁾)や比較構文(《comme...》《une sorte de...》)などが使われる。そういった対象を指し示すのに、IL はかなり不自然だが、ça は問題なく使用することができる。

- (17) a. ?Hier, j'ai aperçu un objet (une chose/un truc) brillant(e) dans le ciel. Il (Elle) se déplaçait lentement.
 b. Hier, j'ai aperçu un objet (une chose/un truc) brillant(e) dans le ciel. Ça se déplaçait lentement.
 (18) a. *Hier, j'ai aperçu comme un éclair dans le ciel. Il se déplaçait lentement.
 b. Hier, j'ai aperçu comme un éclair dans le ciel. Ça se déplaçait lentement.
 (19) a. *Hier, j'ai aperçu une sorte d'avion dans le ciel. Elle (Il) se déplaçait lentement.
 b. Hier, j'ai aperçu une sorte d'avion dans le ciel. Ça se déplaçait lentement.

*

以上の考察から、次のような結論を導き出すことができる。すなわち、名詞によって導入された対象が、具体的で物質的な性質を持っており明確に認知されるものであるならば IL で指示し、このような性質を失えば失うほど ça の使用が要求されるようになる、ということである。

3. 文脈と指示対象の変化

以上は名詞の語彙的性質と対象の変化が問題であったが、今度は文脈や対話の進行過程を通じて関与してくる要因により、名詞の対象に変化が生じる場合を観察する。ここでも同じように、名詞の対象が本来持っているはずの具体的で物質的な性質が何らかの理由で弱められたり、全く別の対象を表すようになると *ça* の使用が要求されるようになることが確認される。以下ではこのような例を二つばかり取り上げる。

(I) 次の例において、〈une voiture d'occasion〉という名詞句が言及する対象は時間的かつ空間的に特定の位置を占める物体であり、「これこれしかじかの中古車」というふうに指し示することができる。そのため、個別性とでも呼び得る性質を帯びることになる。

- (20) a. Hier, j'ai acheté une voiture d'occasion. Elle roule bien.
b. *Hier, j'ai acheté une voiture d'occasion. Ça roule bien.

これと対立するのが非個別的な、すなわち一般的な対象で、「中古車というもの」あるいは「中古車一般」という言語形式で表現され得るものである。次の例では、(20)と同じ名詞句が動詞の時制や法、その他の文脈的要因によって非個別的解釈を受けるようになる。そしてこのような対象は、個別的なものに比べて本来持っているはずの具体的な性質が希薄なので、*ça* による指示が要求される。

- (21) a. *Moi je préfère acheter une voiture d'occasion. Elle roule bien.
b. Moi je préfère acheter une voiture d'occasion. Ça roule bien.
(22) a. *Tu n'as qu'à acheter une voiture d'occasion. Elle roule bien.
b. Tu n'as qu'à acheter une voiture d'occasion. Ça roule bien.

(II) 一般に人名の固有名詞はその名前を持った人間を指し示す。この意味で上述の具体性や物質性を持った対象を導入することになる。したがって、次の例のように当該の人間が問題になっている場合、IL によって指示することはできるが *ça* は使えない。

- (23) a. Je ne rencontre pas Marguerite Duras. Elle m'ennuie.
b. *Je ne rencontre pas Marguerite Duras. Ça m'ennuie.

ところが同じ人物が芸術家や思想家であるとき、文脈によってはその人物の芸術作品や思想体系全体を表すものと解釈されることもある。この場合、çaの使用が可能になる⁹⁾。

(24) Je ne lis pas Marguerite Duras. Ça m'ennuie.

どのような固有名詞がこのような用法を許すかは文化的背景や個人差を考慮に入れなければ一般化できず、網羅的な研究は別稿に譲らなければならない。いずれにせよここで重要なのは、ある種の固有名詞が上記のような転義用法を受け入れ、その場合言及される対象は物質性が欠如しているため、çaの使用が可能になる、ということである。

4. 終わりに

çaが名詞以外の文法範疇で表された意味内容を受けることは最初に見たが、これがどのような性質を持っているか考えてみると、文の表す出来事、動詞の表す動作や状態であることがわかる。とすると、これは名詞によって導入されながらもçaで指示される対象とほぼ同じ性質を持っていると考えて差し支えない。したがって、çaの指示する対象は、それを表現する文法範疇とは無関係に、抽象性や非物質性といった性質を持ったもの、と定義することができる。実際、çaに対応する文法範疇を先行文脈に求めても、明確に言語化されていない場合も多い。次の例では、先行文脈の言語表現を基にして、ある種の推論⁹⁾を働かさなければ代名詞の解釈ができない。

(25) Louise : Mais je t'aimais, moi aussi! Autant que tu m'aimais. Et même plus, la preuve : tu me remplaces, et pas moi...

Rémi : Ça ne tardera pas.

(*Les nuits de la pleine lune*, p. 67)

一方、ILの指示する対象は、名詞によって導入され、かつ具体性や物質性といった性質をもった実体、と規定することができる。

もちろん、こういった二種類の対象の間に明確な境界線があるわけではなく、両者は連続的に繋がっており、その中間に位置するものは二つの代名詞のいずれも受け入れることになる。

註

- *) 本稿の草稿段階でインフォーマントとして協力を惜しまれなかった Jean-Marc Sarale 氏と Christine Lamarre 氏に深く感謝する。なお、例文中の*マークは当該の文が容認されないことを示し、? はそれが完全に排除されるわけではないがかなり不自然であることを表す。
- 1) CHEVALIER *et al.* (1964), MAILLARD (1974), (1987), TASMOWSKY-DE RYCK *et VERLUYTEN* (1982), (1985), CORBLIN (1987), (1991), KLEIBER (1984), (1987), (1990)などを参照。
 - 2) CORBLIN (1987)の中の例文には《cela》が使われているが、筆者自身も断っているように、《ça》に置き換えても大差ない。(7)も同様である。
 - 3) KLEIBER (1981)も同じく、派生名詞の特異な振舞いについて言及している。
 - 4) KLEIBER (1987)がこのような名詞、とりわけ《chose》の特殊な性質を詳しく論じている。
 - 5) PORQUIER (1972), 東郷(1988)にも同様の指摘がある。
 - 6) 指示と推論の関係については、山梨(1992)が詳しい。

[参考文献]

- J.-Cl. CHEVALIER *et al.*, *Grammaire Larousse du français contemporain*, Larousse, 1964.
F.CORBLIN, 《Ceci et cela comme formes à contenu indistinct》, dans *Langue française* 75, 1987, pp. 75-93.
— 《Sujet impersonnel et sujet indistinct : il et ça》, dans M.MAILLARD (éd.) *L'impersonnel*, Grenoble, Ceditel, 1991, pp. 139-149.
M.HERIAU, *Le verbe impersonnel en français moderne*, Champion, 1980.
G.KLEIBER, *Problèmes de référence*, Klincksieck, 1981.
— 《Sur la sémantique des descriptions démonstratives》, dans *Linguisticae Investigationes* VIII-1, 1984, pp. 63-85.
— 《Mais à quoi sert donc le mot chose? Une situation paradoxale》, dans *Langue française* 73, 1987, pp. 109-128.
— 《Quand IL n'a pas d'antécédent》, dans *Langue française* 97, 1990, pp. 24-50.
M.MAILLARD, 《Essai de typologie des substituts diaphoriques》, dans *Langue française* 21, 1974, pp. 55-71.
— 《Un zizi, ça sert à faire pipi debout! les références génériques de ça en grammaire française》, dans G.KLEIBER (éd.) *Rencontre(s) avec la généricité*, Klincksieck, 1987, pp. 133-206.
M.PORQUIER, 《L'emploi de ça en français parlé》, dans *Le français dans le monde* 91, 1972, pp. 9-16.
L.TASMOWSKY-DE RYCK *et* J.P.VERLUYTEN, 《Linguistic control of pronouns》, dans *Journal of Semantics* vol. 1, no. 4, 1982, pp. 323-346.
— 《Control Mechanisms of Anaphora》, dans *Journal of Semantics* 4, 1985, pp. 341-370.
東郷雄二, 「“Mon frère, il est linguiste et le coupable, c'est lui.” 代名詞 IL と CE の用法について」, 『フランス語フランス文学研究』第53号, 1988, pp. 102-111.
山梨正明, 『推論と照応』, くろしお出版, 1992.

[引用出典]

- E.ROHMER, *Les nuits de la pleine lune*, 佐藤清子編, 駿河台出版社, 1989 (L'Avant-Scène Cinéma n°336, 1985)

[付記] 本論は、文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。